研究倫理委員会　年会企画報告

研究倫理委員会企画・研究倫理ランチョンセミナー
【「論文」を情報源とした発信、全部信じて大丈夫？】
●日　時：2022 年 12 月 2 日㈮ 11：45 ～ 12：45
●会　場：幕張メッセ　ポスター・展示会場内特設講演会場（第 14 会場）
●参加者数：121 名
●講　演：井出 和希
（大阪大学 感染症総合教育研究拠点 /ELSI センター）

近年、研究者が論文を発表する形式が多様化しつつあります。特に、オープンアクセス型の出版が急増し、査読を経ないプレプリントの公開や利用も進んでいます。一方、このオープンアクセス化の流れに便乗して、掲載料収入のみを目的とした粗悪雑誌、いわゆるハゲタカジャーナルが台頭し、また、査読を経ていないプレプリントサーバで公開された論文の情報への対応の仕方など、様々な問題や課題が指摘されています。今回の研究倫理ランチョンセミナーでは、最近の学術出版の動向について詳しい、大阪大学の井出和希先生に講演をお願いしました。

まず、本ランチョンセミナーの開催に先立ち、本学会の会員がオープンアクセスやプレプリントについてどのような認識を持っているかを調査するため、昨年 9 月 14 日～ 10 月 5 日にかけてアンケートを実施させていただきました。会員のメーリングリストを使ってアンケートを依頼したところ、633 名もの会員がアンケートに回答してくれました。アンケートでは、本学会会員のオープンアクセスやプレプリントの利用経験、また将来的な利用の希望や見込みを問うような設問に加えて、最後に自由記述欄でコメントをいただきました。

実際の講演では、まず井出先生の自己紹介から始まり、その後で学術出版の歴史を紹介していただきました。16 世紀から刊行され最古の学術誌と考えられている、ロンドン王立協会の哲学紀要の紹介から、1960 年以降に起こったエルゼビアなどの商業出版社の躍進、1990 年代に登場し、現在も増え続けるオープンアクセス型の出版など、時代と共にどのように出版形態が変わってきたか丁寧に説明していただきました。分子生物学の分野では、現在約 4 割の論文がオープンアクセスとして出版されている一方、オープンアクセスとして出版する際にかかる高額な経費（APC）の問題、また転換契約という方式によって、研究者や機関の経費を軽減する試みがなされているという、最近の動向についても説明していただきました。その後、査読を経ていない論文を公開するプレプリントについて、1990 年頃に物理や数学の分野で始まり、2000 年代に様々な分野に波及して、現在は 50 を超えるプレプリント・サーバーが存在していること、各出版社がプレプリントの囲い込みを行っている状況、昨年、日本独自のプレプリント・サーバー Jxive の運用が始まり、今後の動向が注目されていることなどを説明していただきました。さらに、COVID-19 の治療に関する論文がプレプリントで公開され、その情報がメディアで取り上げられた後、元々の論文が取り下げられてしまったという事例など、プレプリントの利用による社会的な影響についても紹介してもらいました。最後に、事前に実施したアンケートの結果を説明していただき、本学会会員の間でもオープンアクセス化やプレプリントの利用が浸透しつつあるが、プレプリントで発表する必要性や、論文でプレプリントを引用することについては、回答者の間でも意見が分かれること、また自由記述のコメントから、回答者がオープンアクセス出版の高額な経費や、プレプリントの利用やその情報の信ぴょう性について疑問を持っていることなどが紹介されました。

講演の後の質疑の時間では、参加者から、プレプリントについての海外の評価や認識について、プレプリントでの公開を求める科学雑誌の動向、プレプリントサービスの維持に係る費用の問題、大学のデポジトリーとの関係、プレプリントの紐付けの問題などについての質問があり、井出先生がそれぞれ丁寧に応答して下さいました。セミナー後に実施したアンケートでは、43 名の参加者から回答が寄せられ、約 3/4 の参加者が「とても面白かった」と回答し、残りの参加者が「まあまあ面白かった」と回答してくれました。自由回答では、「プレプリントの動向が分かりやすくまとめられて勉強になった」というコメントが多数ありました。

事前アンケートの実施、当日参加者の様子、また、事後アンケートの結果を踏まえて、とても有意義なセミナーを開催できたのではないかと思います。改めまして、セミナーに参加していただいた参加者、アンケートに回答していただいた会員の皆様、セミナーの準備に尽力していただいた事務局の山口恵子さん、そして丁寧に講演していただいた井出和希先生に感謝申し上げます。

（文責：座長・中山潤一）